池田自然史博物館

◆ ヨ シ 原 ◆

皆さんが思い浮かべる「日本の原風景」にはどういった景色があるでしょうか？この言葉が古い日本の平均的な風景を意味するとすれば、「水田・棚田」「水車小屋」「茅葺屋根の民家」「神社・仏閣」「雑木林」などと共に、「ヨシ原が広がる水辺の風景」も加えられるのではないでしょうか。



夏のヨシ



冬のヨシ

ヨシはイネ科の多年草で、一般的にアシとも呼ばれ、河川の下流から汽水域や干潟に広大な茂み（ヨシ原）を形成します。ヨシ原では多数の茎が水中に並び立つことから、根元に泥が溜まりやすい条件となり、ヨシが泥や水の中に含まれる汚濁負荷源である栄養塩類を吸収・分解する働きを行うため、環境を改善するヨシ原の「自然浄化作用」も注目されています。



アシハラガニ



オオヨシキリ



カワヨシノボリ

淀川においては、三川合流地点から５km程下流の右岸に広がる「鵜殿のヨシ原」が有名で、下流の十三干潟にもヨシが群生しヨシ原を形成しています。ヨシ原は、生物の棲息場としても重要な役割を果たします。ヨシ原の奥に人や大型の動物が入り込めないこともあって、鳥類のねぐらやエサ場として、クモ類や昆虫類の棲息・産卵場として、魚類の産卵場・避難場・稚仔魚の生育場として、底生動物・甲殻類の棲息場として、さらには小型の哺乳類カヤネズミの棲息場・営巣場としても知られています。実に多種多様な生き物に利用されているのです。

最後に「ヨシ」や「アシ」の名の付く生き物を挙げてみると、鳥類の「オオヨシキリ」「ヨシゴイ」「ヨシガモ」、昆虫類の「ヨシヨトウ」「ヨシツトガ」、魚類の「ヨシノボリ類」、甲殻類の「ヨシエビ」「アシハラガニ」などなど．．．ヨシ原と他の生き物の関り合いの深さが感じられます。

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



淀川河川公園には、平日でも多くの釣り人が訪れる。巨大コイを狙うおっちゃん、ボラの引きを楽しむ青年。男性がほとんどであるが、年齢層は幅広い。とある日、公園内を取材している際、毛馬地区で面白い光景を見た。釣り人に寄り添うアオサギの「あおちゃん」。なんと魚が釣れるのを横で待っているのである。川でアオサギを見かけることは多々あるが、近づくと飛び立っていく。なのに、あおちゃんは1mぐらいの距離でも逃げない。釣り人に聞いた話では、釣れない時はスーパーに行って小魚を買って与えているそうだ。また、別の場所でも魚をもらっているとも言う。毛馬管内を巡回しているのは、レンジャーだけではなかったんだ。（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ 河川レンジャー 淀川管内 VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報

2016年1月号　No.17

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



今はなき「おみくじ巫女さん」

ヤマガラ　*Parus varius*

シジュウカラより少し大きく、背の上と腹部が鮮やかなオレンジ色をしたヤマガラ。ふだんは標高1,000m以下の山間にある広葉樹林に生息していますが、冬季は淀川の河川敷や周辺の公園などで果実を食む姿を目にします。かつて神社の縁日などで「おみくじ引き」として飼われていたことを記憶する人も多いでしょう。人懐っこく、掌からでもヒマワリの種などを食べるほど慣れてくれると云われていますが、鳥獣保護法による捕獲禁止や自然保護の観点から「おみくじ巫女さん」の姿は1990年頃には見られなくなったようです。（画 / 原素子）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

under the water

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

カマツカ

Pseudogobio esocinus



コイ目コイ科カマツカ亜科の仲間で、代表的な底生魚類の一種です。分布は、東北地方以南の本州、四国、九州で、河川の中・下流域や湖沼の砂底に生息し、体長は最大で20cmほどに達します。産卵は、春から初夏の夕方から夜にかけて行われ、卵は砂底にばらまかれます。卵の大きさは1mmほどで、粘着性があり、約1週間でふ化します。体の特徴は、名前にもあるように草刈りなどで使う鎌の柄に似ていることから、この呼び名がついたといわれています。また、口には1対のひげがあり、水生昆虫などの小動物を好む雑食性です。この摂餌の際の行動が面白く、口から餌と砂をまるで掃除機のように吸いこみ、砂だけをエラぶたから吐き出します。水槽で飼育していると、まさに掃除屋さんとして活躍してくれます。





大きな口で吸い込む様は見るものを飽きさせない

このように一見、活発そうな魚に見えますが、実は温和で臆病な魚です。水槽で飼育していて、驚いたりすると、頭から一目散に底砂の中に潜りこみ身を隠します。このような習性から地方によっては「スナホリ」「スナモグリ」などと呼ばれます。また、海水魚のキスに似ていることから「カワギス」などとも呼ばれ、海産のキスにも負けることなく肉質も良く、塩焼きや唐揚げ、天ぷらなどにして食用にもされます。近年の研究で、本種はこれまで1種と考えられていましたが、遺伝的に異なる3つのグループの存在が明らかにされ、関西にはGroup1とGroup2の集団が分布し、吻や口唇の形状、尾柄部などの形態的特徴に違いがみられます。

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

河口のカモ

淀川の河口右岸に矢倉緑地公園があります。淀川と神崎川にはさまれた台形の公園です。冬にこの公園付近を訪れると、たくさんのカモに出会うことができます。全身が黒く、背中からお腹にかけて薄いグレーの太い帯、大きな群れを作っているのはスズガモです。メスは薄茶色で嘴の付け根に白い縁取りがあります。このスズガモ、大阪では冬の沿岸にやってきます。よく似たキンクロハジロは内陸の池などにも飛来しますが、スズガモは内陸部ではほとんど見ることはなく、琵琶湖や宍道湖など大きな湖には飛来します。

淀川の河口から沿岸には、スズガモ以外にたくさんのカモに出会うことができます。ホシハジロやキンクロハジロといったいわゆる海ガモの他、ヒドリガモ、マガモなどのいわゆる陸ガモも飛来します。

陸ガモは潜ることができない、と言われています。よく見るのはお尻半分出して上半身だけを水中に突っ込んで何かを食べている姿ですが、よく観察していると全身ずぶっと潜っている姿を見かけることがあります。陸ガモは潜るに適さない体つきをしているのになぜ潜るのかということはよくわかっていません。みなさんもいろいろなカモが潜っているところを見たら、何をしているのかをよ〜く観察してみてください。



スズガモ



ヒドリガモ（雄雌）



キンクロハジロ



ホシハジロ

スズガモ以外の写真提供 / 池田哲哉

the waterside

the sky & land

the worst 100

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

人を自然に近づける川いい会　捕獲番長　川島 大助

ヘビトンボ

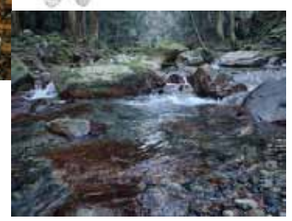
ヘビトンボの和名にはトンボの名がついていますが、トンボ（トンボ目）の仲間ではありません。また、幼虫はムカデのような格好をしていることから、川ムカデと呼ばれることもありますが、毒もなくムカデの仲間でもありません。本種はヘビトンボ目ヘビトンボ科に属する体長6cmほどの水生昆虫です。全体的に茶褐色で、頭部はアゴが強く発達し、腹部には体節ごとに一対のエラ足があります。河川中流〜上流域の清冽な水域の流れの緩やかな平瀬、流れが早い早瀬の礫の下に生息しています。肉食性で、礫の下に棲むトビケラ類、カゲロウ類、カワゲラ類などの水生昆虫を捕食します。

ヘビトンボは清冽な水域に生息していることから、「水質階級　I：きれいな水」に生息する指標種にもなっています。また、肉食性でたくさんの水生昆虫を餌にするため、本種が生息していることは、餌となる水生昆虫が豊富である指標にもなります。さらにヘビトンボは、古くから孫太郎虫（まごたろうむし）などと呼ばれ、子供の疳（かん）に効く漢方薬として使われていたようです。

今年は暖冬のようですが、冬は多くの水生昆虫の幼虫が水中で活発に過ごす季節でもあります（逆に春〜秋は多くの水生昆虫の成虫が陸上で活動します）。ヘビトンボ幼虫も獲物をとるために活性が高まっています。淀川の支流や淀川三川（宇治川、桂川、木津川）、さらに琵琶湖流入河川などでヘビトンボを見ることができます。瀬で石を拾い、石の裏側を観察してみると、まるでムカデのように匍匐するヘビトンボを見つけることができます。掴んでみると噛み付いてきますので気をつけましょうね！







上の写真が幼虫
成虫にると
イラストのようになる

侵略的外来生物 淀川ワースト100

1回休み

今回は当コラムをお休みして、大量遺棄されたニホンイシガメのことを掲載。私のフィールドに持ち込まれた国内外来種です。悲しい現実をご報告いたします。

淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧



去年の11月21日、自宅近くの大正川へ。仲間が5分足らずでニホンイシガメ12頭を捕獲した。冬眠に備える時期なのに変な現象だと思い、一般公開せず、同じフィールドで活動する和亀保護の会に写真を送った。12月10日、和亀保護の会が調査。すると、どうしたものか!!　なんと100頭を超えるニホンイシガメが見つかったのだ。甲羅の形や色合いなどから判断すると、さまざまな産地で捕獲された個体だという。四肢に欠損があるもの、研究者がナンバリングしたものも含まれる。12月14日、私も再び大正川へ。3頭を引き上げた。自宅に連れて帰り観察してみると、前脚が曲がっていたり、後脚が欠損していたり。飼育状況の過酷さが体に表れていた。12月17日、同会はニホンイシガメだけでなく、ミナミイシガメをも保護。死んだ個体も数多くいたそうだ。



劣悪な飼育環境のもとで
頭部が傷ついたと思われる





上の写真は、大量に回収した時の様子。右の写真は、和亀保護の会の西堀さんに引き渡した3頭。

同会の話によると、爬虫類展示即売会の業者が大量遺棄したのではないかとのこと。商品価値がなくなれば、いとも簡単に命を捨てるのか。回収した個体は水族館に引き取ってもらえることになっているが、生き残りが大正川産と交尾すれば、遺伝子汚染が起こる。我々地元民にできることは生き残りを回収することであるが、生体バランスが崩れるのは確かだ。バーチャルな世界が広がる現代社会。幼児からの環境教育の必要性を切に感じている。